

# 辜鴻銘の『日露戦争の道徳的原因』について

島 山 香 織

## 目 次

- はじめに
- I 日露戦争時の清の立場及び反応
- II 辜鴻銘の日露戦争に関する発言
  - 1 辜鴻銘が論じた日露戦争発生の原因
  - 2 辜鴻銘が日本に提示した「三つの事実」
  - 3 辜鴻銘がロシアに提示した「二つの事実」
- III 辜鴻銘とトルストイとの交流
- IV 辜鴻銘の日本女性観
- 終りに

キーワード：辜鴻銘，日露戦争，中国の反応，道徳観，アジアの連帯

## はじめに

辜鴻銘は『尊王篇』を發表後、1904年12月10日から (*Japan Weekly Mail*) に連載を始めた。そして、1906年にはこの連載を上海 Mercury 出版有限公司から『*ET Nunc, reges, intelligite! The Moral Cause of the Russo-Japanese War*』というタイトルで単行本として出版している<sup>1)</sup>。

この中国語訳題『当今，帝王们，请深思！论俄日战争道义上的原因』（日露戦争の道徳的原因）という一文は、日本とロシアが中国領土内で始めた戦争の原因を、西洋列強の誤ったアジア政策にあると糾弾し、中国や日本などアジアの国々に対して武力をもって干渉するばかりで、理知的な面が皆無だとしている。辜鴻銘がここで示した姿勢は、アジア進出に固執するヨーロッパ列強への批判と日本に対する肩入れである。

今日的な視点からこの論文を読むと、当時の世界情勢への事実誤認や偏向的な観点が随所に読み取れる。しかし、この「奇文」とも言える初期の文章にも、後年の辜鴻銘の思想的胚芽が含まれており、辜鴻銘の精神を理解するには欠かせない1ページである。本稿は、まず日露が中国領土内で行った、アジアの歴史の中でも重層的な意味合いをもつこの戦争について、清朝がとった立場及び当時の中国側の代表的な発言に触れておきたい。その上で、辜鴻銘の『日露戦争の道徳的原因』を読み解くことに努め、そこで提起された極めてユニークな視点を分析し、他と異なる辜鴻銘の着眼点を見出したい。さらに、この時期に行われていた辜鴻銘とロシアの

文豪トルストイとの書簡往来や、顕著な日本びいきとも取れる日本認識の形成の原点として突出している日本女性観を、晩年の著書との関連などから探りたい。辜鴻銘のこの一文はもともと英文で発表されたもので中国人や清朝内部の読者を意識せずに書いた、という事実も時代の同時性を考える上で重要なポイントとなることも留意したい。

## I 日露戦争時の清朝の立場及び反応

では、辜鴻銘の論を詳しく見る前に、まず、日露戦争に関しての当時の清朝の対応と言論を追ってみたい。

日露戦争は2004年に100周年となり、日本では記念行事やシンポジウムが盛んに行われ、諸々な角度から研究も進展を見せている。一方、日露戦争は戦争当事者の日本とロシアにとってだけでなく、アジアの近代史においても大事件であり、ある意味きわめて象徴的な戦争であった。しかし、戦場となった中国東三省、そして戦後処理で直接影響を被った朝鮮半島などの地域の心情についての研究は比較的少なかったように思われる。

日露戦争と中国の関係について、川島真は「日露戦争における中国外交」の冒頭、次のように述べている。

日露戦争の主たる戦場のひとつは中国であった。だが、中国は戦争に対して中立という立場を採った。戦場を限定し、その範囲が他国の戦場となることを認めたのである。この日露戦争と中国の関わりについては、これまで決して多くの研究が重ねられてきたわけではない。特に中国では、必ずしも関心が高いわけではなかった<sup>2)</sup>。

それでも、2005年には『日露戦争史料集』（関捷・董志正・田久川編）が出版されるなど関心の高まりが見てとれると川島真は指摘している。そして、川島真は上記の論文の中で、日露戦争に関する中国の外交について、中国の研究に見られる幾つかの視角をまとめ、提示している。日露戦争を歴史的、外交史的な視野でとらえるのは本稿の目的ではないが、辜鴻銘という一文人の発言の大きな時代背景を把握するうえで、欠かせない座標のひとつといえる。

川島真の提示した内容は次のようなものである。

- 第一、帝国主義の中国への侵略という角度。
- 第二、戦争への「中立」の内容や経緯を検討する視角。
- 第三、満州利権をめぐる問題
- 第四、国権回収という観点からみた、日露戦争に際しての中国外交史的観点。
- 第五、戦争そのものへの現地社会への動員、破壊、損害、占領統治問題。
- 第六、日露戦争が日本においての位置づけ、アジア諸国との関係でいかに論じられたか。

川島真は、このように中国での研究領域は多様だが、まだ「端緒についたばかり」で今後の進展が待たれるとしている。さらに、1896年に締結された「露清秘密同盟条約」や1904年の日露戦争開戦直後に清が中立を宣言し、「局外中立条規」を定めた経緯などについて論じているが、多く教えられる内容が含まれている。

また、日露戦争の戦場だった中国東三省、及び中国の人々の心情を主に検討したいという本稿のねらいにより直接的なヒントを与えてくれたのが吉澤誠一郎の「日露戦争と中国——その知的刻印を考える——」である。

吉澤誠一郎はまず、日露戦争の重みについて突出したものと強調するより、1904年から1905年にかけて国際政治の場で起こった他の事件をも考慮に入れ、巨視的にとらえるべきだとしている。その中で重要なものとして清朝とイギリスとの間でチベットをめぐる紛争があり、1904年に英印軍がラサに侵攻して英蔵条約を結び、チベットにおける「イギリスの優越」を認める結果となったことを挙げている。さらに清朝は英国と折衝したのち、1906年に英清条約を結んだ。さらに、1905年には、アメリカの移民制限をめぐる全国的な大規模な反米ボイコットが発動され、中国ナショナリズム形成にとって画期的な出来事だったと指摘している。

吉澤誠一郎によると、1905年には科挙が廃止され、「経書の知識でなく、別の基準による国家エリート登用の方途が模索される」なか、多くの若者が日本に留学にやってきたのである。このような状況下で、亡命した康有為、梁啓超ら維新派からも、孫文ら革命派からもロシアや日本、及び日露戦争についての発言が見られた。しかし、吉澤誠一郎は次のように述べている。

以上から、1905年は、多様な動きが形をとった重要な転機だったとみてよい。その中には、日露戦争と一定の関連を指摘できるものもあるが（これは同時代である以上、当然のことだが）、それを過大にとらえてはならない。

つまり、日露戦争と中国という問題設定は、この時期の中国について考える場合、非常に限定された問いの立て方であることを、まず確認する必要がある。……日露戦争の影響のありかたは、複雑な経路をとって現われてくるということも、留意しなければならない<sup>3)</sup>。

この指摘は大変的確で重要である。辜鴻銘という一文人の発言の真意を理解する際にもおさえておくべきポイントである。

吉澤誠一郎はこのあと、当時日本に滞在している中国人の発言や反応を論じ、分析している。ロシアは義和団鎮圧のため東三省を占領したが、1901年の辛丑和約締結後も、撤兵せず、このことは日本が朝鮮の政治をおさえる障害になり、日露戦争の重要な前提となった。そして、中国でも「拒俄」（ロシアを拒む）運動が起こった。日本にいる留学生たちも義勇隊を組織して口

シアと戦おうと主張したが、吉澤誠一郎は「この時期の日本の報道は、大勢としては、ロシアの非道・不正を批判する観点が強いものであるから、日本において情報に接するならば、反ロシアの観点が助長されやすかったと言ってよいだろう。」と述べている。

また、梁啓超が1902年、横浜で刊行した雑誌『新民叢報』の記事から、当時中国知識人の日露戦争の捉え方の一例として紹介している。ここで、まず「日露戦争の将来」というタイトルで1904年に掲載された長文を引用しているが、その中に次のようなくだりがある。

第三者の立場からいうと、日露戦争が東亜に影響することが二つあると言える。一つは、黄人が白人を大したことないと見る気持ちを生じさせることであり、一つは中日人民の共感を喚起することである。(中略)

今や民族主義が興り、中日人民の利害・共感・団結の勢いはますます確固たるものだ。そして日露の戦いとは実に東亜民族主義の發揮の兆しである。まして我が国から留学した人士は多く日本に来ており、日本の学者もまた多く我が国に漫遊しているからには、将来、思想の連帯がますます發達するだろう。欧州の大陸にひけをとらないのも、日露の戦いを嚆矢とする。私は、謹んで剣を抜き立ちて祝していわく「我が国の武運万歳」と。私は、さらに剣を抜き立ちて祝していわく「東亜の武運万歳」と<sup>4)</sup>。

吉澤誠一郎は、上記の引用中、日露戦争を白色人種と黄色人種の対立として見ようとし、中国は人種的にも日本と同じ立場だと強調する意図が明らかだと指摘している。「当時の日本で流布した論法を、うまく換骨奪胎して、悪役のロシアに対して中国と日本の人民が連帯してあたるという図式を作り出している。」しかし、ここでは、1900年の義和団事件に際し、日本軍が義和団鎮定に加わっていたことは、まったく忘れているようで、日本を声援し、さらにそれを中国ナショナリズムと結びつけようとしていると分析している。

ここではほんの一例を挙げたに過ぎないが、日露戦争をめぐる中国の立場は無力かつ複雑であり、清朝政府としては、自国の領土が日露両国の戦争の場とされる屈辱的な状況のもと、如何に中立を保ち、自国の權益を守ろうとしていたかが伺える。そして、日本滞在中の留学生の反応はまた異なる温度が感じられ、日本国内の反ロシアの輿論に触発され、人種的にもアジアの連帯を唱え、結束して欧州に対抗しようという高揚感が充満している。それにしても、日清戦争の敗北からそう月日がたっていないのに、日本に対して連帯感が生まれるという事実は、やはりその時代性の中で理解するべきものだと思うを得ない。

では、辜鴻銘の日露戦争をめぐる発言はどのようなものだったのか。辜鴻銘は恐らく中国国内の読者を全く意識せず、国外の、それも英語圏の読者に対して発した意見である。次はそれを詳しく検討したい。

## II 辜鴻銘の日露戦争に関する発言

『*Et Nunc Reges, Intellegite! The Moral Cause of the Russo-Japanese War*』は日露戦争とほぼ同時進行で新聞に連載された。

この中で、辜鴻銘はまずこの中国の領土内で繰り広げられた日本とロシアの戦争は、ただただ災難と苦痛を人々にもたらすだけの悪夢だと嘆いている。そして、一日も早く戦争を終結すべきだと主張した。そして、辜鴻銘はそれを実現する方法の唯一の提起者として、ロシアの文豪トルストイの名を挙げている。辜鴻銘によると、トルストイはここで「儒教的な方法」を提唱した、と述べている。

私が知る限りでは、トルストイ伯爵ただ一人以外、この不幸な戦争を終わらせる唯一の正しい方法を公言した者はまだいない。(中略)トルストイ伯爵は世界に対し、自国の国民に対し、そして日本国民に対し、よく自分を反省し、或いは孔子の言うように本当の自我を取り戻し、心理バランスを回復させ、公正な判断力を保持することを要望している<sup>5)</sup>。

辜鴻銘は、日露戦争の勃発は道徳観の欠如に起因していると主張し、この観点がこの一文の基調になっている。今日的な観点からすると肯定し難くも思われるが、日露戦争当時の清朝政府の中立的立場、及びそこで発せられた言論と見比べると、やはり長期の欧州滞在経験をもち、感覚的に外の世界を理解し、ヨーロッパ言語に堪能な辜鴻銘ならではの発言だと感じられる面もある。

『*Et Nunc Reges, Intellegite! The Moral Cause of the Russo-Japanese War*』という文章は次のような構成からなっている。

まず、最初に日露戦争発生 の道徳的原因について辜鴻銘独自の視点で分析を行っているが、この部分が約三分の一を占め、次は日本に対して「三つの事実」を述べ、そしてそのあとにロシアに対して「二つの事実」を提示している。清朝政府がこの戦争における立場は中立だったということはすでに前述した通りだが、辜鴻銘の個人的な立場からの発言も喧嘩している両者の間に立ち、戦争を休止するようそれぞれを説得しようという姿勢をとっている。

### 1 辜鴻銘が論じた日露戦争発生 の原因

日露戦争という不幸な事態を一日でも早く終息すべきだ、という立場を表明している辜鴻銘だが、そのために必要な、いわゆる「公正な判断力」を日露双方に期待するのはまた容易ではないと分析している。

辜鴻銘が言うには、ロシアは戦場で部分的だが敗北を喫し、その痛みの最中にあり、そして彼等は敗因を戦争への自らの準備不足にあるとし、日本に対して特別邪悪な意図を抱いていた

わけではない。ゆえに、仕掛けられた戦争から簡単に手を引けないと思うだろう。この点での辜鴻銘の論じ方は当時の日露関係、満州における列強の利権争い、さらに清国および朝鮮半島を含むこの地域の錯綜した情勢にはほとんど深入りせず、もっぱら、ロシア人の心情を注視しているところが特徴的である。

そして、もう一方の日本に対しても、問題の捉え方は同様である。辜鴻銘は日本人について「公正な判断力」を要求するのはロシア人以上に難しいとしたうえで、日本が弱小民族としてロシアのような大帝國に打ち勝ったこと自体、「日本人の道德水準と文明度の高さ」を証明した、としている。しかし、この論じ方はかなり強引で、最眞目を感じられる。

さらに、このあと辜鴻銘は驚くべき論点の展開をするのである。

日本民族はこの50年来、ある大きな目標のため痛ましい犠牲を払ってきたのだ。それは若くか弱い日本の少女たちを異国の地に送り出したことである。

また如何なる偉大な目標が世界文明の麗しき花——あの弱く、従順で、純潔で敏感な日本の少女に犠牲を強いて、香港、天津、山海関、旅順などへと流れ行き、貞節を売り、貧困と苦しみを味わせるのだろうか？この種の貧困と苦しみは如何なる女性であれその敏感な女性の天性を傷つけ、破壊するものである。それが高度に品があり、聡明で芸術的な天性を具えた日本女性であればなおさらである。——貧困と苦しみはかつて彼女たちを絶望させ、ほとんど発狂させるほどのものだった。幸いな事に彼女たちには優秀な道德的品性があり、そのおかげで大きく傷つくことはなかった。あの典型的な日本女性の優しさ、誠実さ、勇敢で優雅な女らしさはそれほどの損傷を受けなかった<sup>6)</sup>。

貧困ゆえに、あるいは国家政策のために多くの若い日本女性が異国の地に赴き、辱めを受け、搾取されていた事実は、日本が近代国家へ転身する過程における覆い隠せない暗部であることは否定できない。しかし、この点を日露戦争と関連づけるのは辜鴻銘の偏頗な思考の表れと言わざるを得ない。実は、この発想は辜鴻銘自身の個人的な背景が深く関わっており、それについては後述する。

辜鴻銘の論はさらに続く。ヨーロッパ人は執拗に日本や中国に来ようとしているが、彼等は「半端に開化され、半端に教育を受け」、「残虐な暴力と金銭を崇拜している」、「心の中に神はいず、政治の世界には道德がなく、ゆえに道德や法律を認めもせず恐れもしない、残虐な武力以外何一つ恐れぬ」人々であると断じたうえで、

このような現代のヨーロッパ人がどうしても日本や中国に来ようとするのなら、日本人や彼等がアジア人と称する人々に対し、道德や法律が要求するすべての尊重を心得てください。皮膚の色によってではなく、彼等の人間として備わっている道德や品性によって判断



してください。もっと具体的に言えば、日本や中国にいるすべてのヨーロッパ人に、血色も良く、ブルーのベールを覆ったヨーロッパの女性に対するのと同じように、同様の尊重をもって最も貧しい日本と中国の女性に相対すべきである。この要求の実現が、日本の全民族が高貴な殉教者のようにこの50年間痛ましい犠牲を払った偉大な目標なのである<sup>7)</sup>。

アジアに進出してきたヨーロッパ人たちが、アジア諸国の人々、とりわけ女性たちに敬意を払わず、見下し、侮辱するような数々の所業が恨みの感情を呼び起こし、それらが蓄積して爆発し、この日露戦争勃発の心理的、感情的誘因となった、と辜鴻銘は言いたいようだ。そして、辜鴻銘は日本人に対する助言として、怒りの感情を制御し、心理的な平静を保つべきだとしている。

日露戦争自体は、ロシアと日本のそれぞれが植民地での利権の確保のための衝突であり、しかもその戦場が当の日本でもロシアでもなく清の領土内であるという事実に触れていない辜鴻銘の論法は今日的な視点から見るとはなはだ見当違いである。このあと辜鴻銘は日本に「三つの事実」、ロシアに「二つの事実」を提示し、さらに持論を展開するのである。

## 2 辜鴻銘が日本に提示した「三つの事実」

辜鴻銘はまず、日本に次のような「三つの事実」を提示している。

その一は、日本人が外国、特にヨーロッパ人たちの「メガネ」を通して問題を見ており、ロシア人の品格に全く間違った見方をしている、と言う「事実」である。

そこで、辜鴻銘は目下、ヨーロッパや日本の新聞及び文学作品に描かれているロシア像は「悪辣、悪賢い、自分勝手」であるが、それは全くの誤りだとしたうえで、林四兵衛という日本人作家が *Kobe Chronicle* の中で、アイヌの人々がロシア人を「良い人」だと褒めたことに触れている。さらに、ヨーロッパで最も教養と智慧を兼ね備えた人物として、ロシア女帝エカチェリーナ2世のロシア人評を紹介しているが、「勇猛、果敢、誠実、慈悲深く気前もよい」、さらに外見上も「体格壮健で容貌も立派」、正々堂々と振る舞い謀を嫌うとロシア人の美点を並べたてている。最後に、辜鴻銘は1891年5月11日、来日中のロシア皇太子ニコライが襲われた大津事件を挙げ、事件当時ロシアやロシアの新聞が如何に人道的かつ公正で度量のある対応をしたかを、日本人は改めて思い起こすべきだと忠告している。

戦争は人間が起こしている以上、対戦国同士の国民感情抜きにして戦争終結は語れないのは当然であるが、辜鴻銘はまず、このように間に立ち、両国民間の憎悪を少しでも薄めようとしたのだろうか。確かに、極めて情緒的かつ単純な思考ではあるが、辜鴻銘の愚直な一面が表れている。

その二は、これも日本人が「ヨーロッパ人の眼鏡」を通して、ロシアの外交と対外政策に不合理かつ不公正な評価を下した、としている。第一点目の「事実」と関連づけ、ロシア国民の

国民性の長所からして、その国家や政府も当然品格を備えており、欺瞞や侵略という面を呈することはないだろう、とあて推量をしている。ここで、辜鴻銘はビスマルクの著書『思考と回想』や書簡から、ロシアの外交が欺瞞に満ち、信頼できないという見方を否定しているくんだりを引き、自説の裏付けとしているが、これもまた恣意的な論の進め方である。

さらに、辜鴻銘が挙げた「事実」その三とは次のようなものである。

目下世人から見て明らかなのは、ロシア側が日本に対して誤った行動や不公正を行ったが故に、日本民族にロシアとの開戦に正当な理由を与えた。——このようなロシア側の明らかに誤った行動と不公正の態度の大部分が、日本帝国政府の誤った誘導政策に火に油を注いだようなものなのだ<sup>8)</sup>。

このあと、辜鴻銘はさらに詳しく論を進めていくのだが、それは今日的な視点では理解に苦しむところを多数含む「奇論」である。

辜鴻銘の論はこうである。まず、日本がロシアと開戦した理由は二つ、一つは「ロシアが満州を不法に占領し、日本が満州問題に口出しすることを拒んだ」、もう一つは「満州問題の協議過程において日本に対するロシア政府の態度は思慮に欠け、無礼に近いものだった」。そこで、辜鴻銘はまずロシア側の立場を説明する。その解釈によると、ロシアの満州政策は日本や世界各国が満州での利益や合法的な特権を「分かち合う」ことを拒むものではない。しかし、「満州の本当の主人」の中国以外の者が、満州でのロシアの絶対的な自由行動を干渉することを拒絶しているのだ。この点はロシア帝国の大原則であり、日本がこの満州問題に口出しすることを許さないのもこの大原則の堅持のためである。そして、もしこの点でロシア政府が譲歩すれば、大ロシア帝国全体が分裂し、崩壊してしまう、というのである。

明らかに植民地時代、帝国主義時代の強者の論理である。「満州の本当の主人」の一員で中立的な立場にいる辜鴻銘はここで一旦ロシア側の代弁者になっているが、次にロシアが中国に取った態度も批判し、ロシアが満州を占領するのは不法であり、中国に対しても「正当な道理が通じるまでは強権に頼るのみ」という姿勢であると非難した。

ここで辜鴻銘は「ロシアにはいかなる権利があって満州に居座るのか」という質問に答える形で日本に言及している。その論点は実に突飛なものだが、あの時代の言論の一つとして分析を試みる。

辜鴻銘は前述の通り、日露戦争の誘因としてロシアが日本を尊重しなかったとしているが、同じ思考からなのか日清戦争についても、当時の清朝政府内の腐敗した無能な官吏を懲らしめるためだとしている。辜鴻銘は洋務運動を主導した李鴻章一派をとりわけ毛嫌いしており、ヨーロッパ人には媚び諂い、同じアジアの日本を軽視したため招いた結果だとしている。朝鮮半島での支配権や利権をめぐる争いという根本的な戦争原因についてはまったく言及していない。こ



こでの辜鴻銘の視点は事実誤認か、あえて事実を無視し自らの恨みを晴らすべく、李鴻章一派を攻撃したとも読み取れる。しかし、それでも中国人の言論としては理解しがたく、日本への肩入れの度合いに驚くばかりである。

日清戦争後の賠償について、さすがの辜鴻銘も日本はあまりにも行き過ぎた要求を清朝側に突き付け、それは「道徳的法則を破る」行為だと非難している。東京の著名な教授たちの帝国主義的な対外拡張を鼓吹する論文<sup>9)</sup>を読んだ辜鴻銘は、中国に台湾や遼東半島の割譲を迫り、新たに開港場を要求するのは暴挙であり、まるで乱暴な義和団のやりかたと同じだとしている。ここで義和団を挙げたのは、最初は邪悪の勢力と闘い、正義のために立ち上がったのだが、最後は乱暴狼藉を尽し暴民に化してしまった様子と同じだと言いたいようだ。そして、そのような日本を露仏独三国が干渉するのも当然の結果だとしている。

辜鴻銘は露仏独三国干渉の動機、とりわけロシアの動機について次のように述べている。ロシアが日本の暴走を抑え、中国の領土保全に動いた真の目的は、国民の軍事的負担を減少させるためであり、あくまでも自国の利益のためである。

満州が日本の一部ではなく、依然として中国の一部であり続けることをロシアが望む理由として、中国が軍事的な民族ではないが日本はすでにそのような民族になっている。もし満州が日本帝国の一部分となれば、ロシアは東部国境に大量の軍隊を保持せざるを得ない。そうなればロシア国民にとってこれ以上耐え切れない軍事負担となる<sup>10)</sup>。

さらに、このあと辜鴻銘はロシアが満州に「進入」した理由について論じている。その論点をまとめると、まず、清朝政府が自ら迎え入れたのだとしている。日清戦争に敗北したあと、李鴻章一派は日本の貪欲な要求に迫られたが、露仏独三カ国の登場で満州、正確には遼東半島を再び領土として保全することができ、聊かメンツが保たれたのである。そこで清朝政府はロシアと同盟関係を結ぶ密約をし、ロシアとは満州での鉄道建設を許す代償として有事の際は中国の代わりに戦争をする、と約束を交わした。辜鴻銘はロシアのシベリア鉄道建設は地球上の荒野を開拓し、東西の貿易を促進し、人類全体に利益をもたらすとしたうえで、ロシアは満州を不法占拠したわけではなく、主人である中国の同意を得ており、しかも鉄道建設がもたらす利益を中国と分かち合うようにしていると強調した。そして、ロシアが満州に出兵したのも、撤退を拒むのも、自分たちが築きあげた「財産」を守るため、特に義和団事件以降はその「脅威」を感じたからだとしている。

ここまで辜鴻銘はロシア側の立場を代弁し、心情的にはロシアの満州政策を否定していないことが読み取れる。今日的な視点から見ると帝国主義的な植民地政策に変わりはなく、中国人の立場としては大いに問題がある。しかし、過去のあの時代の中にこの問題を置いた場合、中国内部から見た視点とは異なる辜鴻銘の捉え方が窺える。最後に、辜鴻銘は日露関係が悪化し、

この戦争に至った最大の原因は日英同盟の締結だとしている。辜鴻銘は、この同盟締結当初から極東の和平を破壊するものだと、ある英国人の友人に語ったことがある。

ゆえに公平無私にこの問題を観ている如何なる者も、この英日両国同盟に責任を負う政治家は厳しく糾弾されるべき罪人だと気付くだろう。彼等の判断能力の欠乏の度合いはまるで犯罪である。いずれにせよ、日本民族にとって、英日同盟は日本が欧州各国と接触を開始以来、権力の座にある日本政治家が歩み出した最も禍深い一歩である。もしこの英日同盟がなければ、ロシアは軍事と外交において日本、及び朝鮮にいる日本人に対して、さらに中国と満州の中国人に対する態度も大きく異なるだろう。事実、もし英日同盟がなければ満州問題は容易に解決できた<sup>11)</sup>。

辜鴻銘はどうやらヨーロッパの強国の中でも英、仏、独三カ国のやりかたに強い反感を抱き、それに対して比較的後進的に植民地進出を争っていたロシアと日本には異なる尺度を持っていたようだ。このあと辜鴻銘は、日本人が欧州の政治に関わり、世界的にも真の強国になる事に反対する理由はない。しかし、「彼等が英国人の友人や東京の教授たちの言うように、欧州諸国の植民地政治の狂った競争に参加しようとするなら」、何も手にする事が出来ないだろうとしている。日本がアジアの中で西洋列強に対抗し得る国として賛美し、肩入れするのは辜鴻銘の一貫した姿勢だが、それは、自国の清朝政府の無能ぶりへの失望と表裏一体なのである。とりわけ洋務運動を主導した李鴻章一派への不満が積もり積もった結果、かなり個人的な嫌悪の心情が辜鴻銘の舌鋒を鋭くさせている。

## 2 辜鴻銘がロシアに提示した「二つの事実」

辜鴻銘はロシア側にも「二つの事実」を提示している。

その一は、ロシアが極東に派遣している外交官の硬直さと「官僚主義」である。辜鴻銘は自身の体験及び周りから聞き及んだこととして、一般的なロシアの外交官は「自由な教養や文化的な素養のない人たちで、彼等は自身が受けた教育に縛られ、ただフランス語で型式張った書式の公文書を書くだけである」。さらに、ロシア駐中国公使館には有能な中国語通訳が一人もいない、満州における鉄道事業などロシアが擁する巨大な利益を考えると、この事実は実に恐ろしい状態を露わにしている。そして、このロシアの役人たちの「官僚主義」はロシア皇帝から他の政府首脳まで、何か指示を部下に与える時、決まって最後に「多く語るな」で結んでいる、という事実を付けくわえ、辜鴻銘はこのような硬直した官僚主義がロシアの極東政策を失敗に導くだろうと分析している。

次にその二として挙げたものは最初に触れた内容に通じるものである。

ロシア民族及び帝国政府はこの戦争に至るまである根本的な間違いを犯している。それは日本民族が犯した如何なる間違いより大きな間違いである。それはつまり、彼等が中国や日本と往来するとき、非常に文明的な民族と関わっていることを知らずか、十分認識していないといことだ。これらの民族はそれまで彼等が接してきた中央アジアの部族と異なり、より道徳的な力に従う。残虐な武力ではなく、ましてやその残虐な武力をひけらかしての威嚇に従うはずもない<sup>12)</sup>。

このあと辜鴻銘は、ロシアは当初日本を攻撃する意図は全くなかったが、日本認識の誤りや相手への軽視が災いし現在のような局面を招いた、としている。そして、1900年の義和団事件に際し、北京駐在の欧州各国の外交官たちは当時中国の各階層に非常に強い西洋人への嫌悪感があることを知りながら、誤った判断をしたため、義和団をはじめ中国人の怒りに一気に火をつけたのだという。その誤った判断とは、道徳の力でもなく、また物質的な力でもなく、武力に訴えて中国人たちの憤懣を抑え込もうとしたことだと辜鴻銘は断じている。そして、日露戦争においても同様に、ロシアは日本に充滿しているロシア憎悪の感情を武力で解消しようとした点が最大の失敗だとしている。なぜなら、日本民族は高度の文明を擁し、きわめて訓練された軍隊をもっているからというのである。

このように、辜鴻銘は日露双方にそれぞれの「事実」を並べたうえで、日露両国の国民、軍人そして政治家に次のような要望を提示している。

二つの民族、特に道徳的で文明的な二つの民族が互いに恐ろしい誤解の犠牲になっていることに気付いた時、もし彼等が本当に自分たちが言うように人類と文明の利益に関心を抱いているなら（私はこの点に聊かの疑いももたない）、彼等の絶対的な責任は直ちに目下の不幸な戦争を終わらせることである<sup>13)</sup>。

そして、平和を回復するために最も重要なのは、対戦している両国国民が各自反省し、本当の自分を取り戻し、心の平静及び公正な判断力を回復することだと、辜鴻銘は最初に表した観点で結論を導き出している。

### Ⅲ 辜鴻銘とトルストイとの交流

前述のように、辜鴻銘は日露戦争について発言を繰り返すなかで、トルストイの名前をたびたび提起している。この戦争の発生要因は道徳観の欠如にあるという持論を展開するうえで、自らの論点に近いトルストイと相呼応することを期待したのかもしれない。

トルストイは日露戦争について当然頗る関心を抱き、多く言及していたが、その中でも有名

な反戦論として、1904年イギリスのタイムズに『思い直せ』という文を寄せている。その一方、1904年1月3日の日記には「絶えず戦争のことを書いている」としたうえで、76歳の高齢かつ心臓が弱っているため「うまくいかぬ」と嘆いている。また、同年の12月31日の日記には次のように書いている。

1904年12月31日

始終、衰弱のようなものが私を苦しめている。心臓だ、と思う。立ち去りたくない（死にたくない）という気持ちはさらさらしない。

旅順口の陥落は私を悲しませた。苦痛だ。これは愛国主義である。私はその中で育成された。個人的なエゴイズムから、家族的エゴイズム、貴族的エゴイズムからさえも自由でないと同じように、私は愛国主義からものがれられないのだ。これらのエゴイズムはすべて私の中で生きている。しかし、私の中には神の法の自覚があり、この自覚がこれらのエゴイズムを拘束している。だから、私はそれに仕えないでいられるのだ。そしてしだいにエゴイズムは萎縮してゆくのである<sup>14)</sup>。

このくだりは、12月20日に旅順口要塞が陥落した報せを受け、トルストイが記したもので、悲痛と感じるのは愛国主義からのがれられないからだとしている。一方、同じくのがれられないのは「エゴイズム」だが、それに対して「神の法の自覚」によって拘束し、それを萎縮させているが、果たして「愛国主義」という感情はどう消化されたかは詳らかにしていない。

そして、翌年の日記にはまた次のようなくだりがある。

1905年5月19日

昨日、ロシアの艦隊が破滅したというニュースを聞いた。このニュースはなぜか特につよく私の心を打った。このことは、他の形ではあり得なかったろうし、あり得ないということが、私にははっきりわかってきた。——たとえわれわれが悪いキリスト教徒であっても、戦争とキリスト教の信仰とが両立し得ないということを隠すわけには行かない。最近（三十年前に知って）この矛盾がなお一層、自覚されるようになってきた。

日本は数十年で、西欧やアメリカの民族に肩を並べたばかりか、技術的な向上の点では彼らを追い越してしまった。単に戦争の技術におけるばかりでなく、すべての物質的な改善の技術面での日本人の成功は、これらの技術的な向上、文化と呼ばれているものが、いかにくだらぬものであるかを明白に示したのである<sup>15)</sup>。

実際に、対馬沖海戦で日本海軍がバルチック艦隊を撃破したのはこの年の5月27～28日だったので、トルストイの日記中の海戦がなにを指しているのか疑問が残る。自国の大艦隊が敗北

したことに心を痛めるのは至極自然な心情の吐露である。しかし、「戦争とキリスト教の信仰とが両立し得ないということ」という矛盾をも同時に重く抱え込むのである。そして、対戦国日本について、トルストイは数十年で西欧やアメリカに肩を並べ、技術的に向上したと評価する一方、武器や軍艦などの「文明の利器」の力がただただ戦争という場で発揮されている現実を皮肉っている。

辜鴻銘はトルストイを尊敬し、心情的にも共鳴するものがあったのか、あるいは単に世界的な大文豪に自説を知ってもらいたかったのか、日露戦争終結後の1906年3月に、『日露戦争の道徳的原因』及び『尊王篇』をトルストイに送っている。それらを受け取ったトルストイは1906年8月に秘書を通じて自著の英訳版を返礼として辜鴻銘に届け、さらに9月から10月にかけて新聞掲載という公開した形で長文の返信を発表している。この「ある中国人への書簡」と題した手紙の中文訳は1911年に『東方雑誌』に掲載されている<sup>16)</sup>。

トルストイの手紙は次のように始まる。

親愛なる先生

中国人の生活は常に私に最高の興味を抱かせます。私はかつて自分が知るべき全ての事を懸命に知ろうとしました。とりわけ中国人の宗教の知恵の宝物である孔子、老子、孟子の著作、及び彼らに関する批評と注釈に対してです。私はかつて中国仏教の状況も調査し、ヨーロッパ人の中国についての著書も読みました<sup>17)</sup>。

トルストイはまずこのように中国の先哲に敬意を表したうえで、ロシアを含む欧州諸国が中国に働いた数々の「残虐、横暴、不道徳」な行為を糾弾している。さらに、それらの暴力に対して中国人は反抗ではなく、忍耐をもって相対した結果、欧州列強の傲慢をさらに増長させたとしている。

しかし、この後に続くトルストイの提言はおよそ中国やアジアには受け入れ難いものだった。「最後まで耐えられる人こそ唯一の幸福者」とトルストイはキリスト教徒の真理を述べ、「悪をもって悪に報いず、悪と協力せず」が悪を働く者に打ち勝つ最も妥当な方法だと説いている。トルストイは、たとえドイツ、イギリス、ロシアさらに日本と列強が中国の領土や利権を窺っているとしても、中国人民が欧州のまねをして武力に訴えるのは決して有益ではないと述べているが、実に身勝手な理屈である。その理由として、中国人、ベルシャ人、トルコ人、インド人、ロシア人そして日本人も含めた「東方民族」はまだ、ヨーロッパの腐敗した文明の網に捉われていない。ゆえに、彼らには新たな自由の道筋を世界に指し示す責任がある、それはすなわち中国語でいう「道」の思想であり、これこそ人類の永久な法則と合致するものである、としている。また、トルストイは次のように述べている。



しかし私があなたの手紙から、また他の方面から得た知らせでは、一般的に物事を軽率に進めようとしている人々は、——いわゆる「改良派」がそうである——中国は西洋の国々がしてきたことを模倣すべきだと信じている。言い換えれば、憲法をもって軍人専制に代え、西洋と同様な軍隊を創り、そして実業を振興する。表面的に見ると、この結論は極めて簡単のようで、自然でもある。しかし、本当は大変軽率且つ愚かなのだ。——私の中国に対する認識から言うと、これは見識のある中国人には適しない。もし、欧州民族の真似をして憲法を創り、軍隊を設置し、もしかすると厳しい強制的な徴兵制度まで勵行し、そのうえ実業も興す。これらは中国人の生活すべての基盤を否定し、彼等の過去、淡泊で静かな農民の生活を否定し、真の生命の唯一の道筋——「道」を捨てる事になる。中国に対するだけでなく、全人類に対してである<sup>18)</sup>。

トルストイはこの書簡の中で、具体的に日露戦争に言及していないが、非暴力、非武力を理想とし、中国やアジアが好戦的な欧州の国々を模倣することは、平和で穏やかな農業文明を破壊することになり、そして長い間持続してきた東方の哲学「道」をも消失させてしまうのではないかと憂慮している。

前述の日記にあるように、日露戦争においてロシア軍の劣勢や敗北の知らせに心を痛め、愛国者とキリスト教徒という両方の立場の葛藤に苦悩していると記しているが、中国人に対しては、武力をもって列強に対抗したり、欧州諸国の権益争いに巻き込まれるのは得策ではないと忠告している。さらに、トルストイの論法からすると、「西方の民族」は東方の民族に示したのは模倣すべき手本ではなく、やっちはいけない手本だということになる。そして、トルストイは政府の存在に疑問を抱き、政府があればこそ国際関係を口実に列強に圧力をかけられるのだとしたうえで、とりわけ議会政治の欺瞞性を否定している。どうやらトルストイは欧州諸国の近代文明や政治体制が国を疲弊させ、危機を生みだし、国民の暴力崇拜を煽ぎ、戦争へと導いたと言いたいようである。東方の民族には同じ轍を踏んでほしくないとの思いなのだろうが、この論点は明らかに多くの矛盾を含んでおり、アジアを含む後進国の後の歴史的進展を見ても誤謬と思わざるを得ない。

そして、トルストイは書簡の最後に書いている。

もし中国人が今までのように安らかで勤勉な農民の生活を継続するなら——たとえそれが最低限のものだとしても、しかも自分の行為が儒、道、仏と言う三教の教義——基本的な原則は符合している——に背くことなくすれば、武力の束縛を受けず（道教）、己所不欲、勿施與人（儒教）、犠牲、謙讓、人類やすべての生命を愛する（仏教）、もし中国人がこのように行動すれば、現在の彼らの苦難は自ずと消滅し、将来において世界中のどの強国も彼らを屈服させることはできないだろう<sup>19)</sup>。



結局のところ、トルストイが語ったのは現実離れの夢物語だったが、この中で辜鴻銘が共鳴できる点を挙げるなら、それは儒教、道教、仏教の教義を持ちだしたところと、西洋文明に習って洋務運動を推し進めた「改良派」への批判だっただろう。辜鴻銘が、日露戦争を終結させるために、双方の道徳心に訴えかけ、真の「公正な判断力」を取り戻すことを呼びかけたが、トルストイの書簡にはこの点についての直接的な言及は見られなかった。しかし、そのかわり東方民族の「道」の哲学こそ世界を危機から救うもう一つの価値観だとトルストイが答えたことは、辜鴻銘も我が意を得たりと感じたのではなかったのだろうか。

この書簡から2年後、辜鴻銘はトルストイの生誕80歳記念祝いに祝賀文を送っている。その中で、トルストイが世の中の人心を正し、世の平和を願い、深い学識をもった大文豪と誉めたたえている<sup>20)</sup>。

#### IV 辜鴻銘の日本女性観

辜鴻銘は『日露戦争の道徳的原因』という一文の前半で、この戦争が発生した原因として挙げたものは今日的に見て驚くしかない視点だった。前述のように、日本政府や国民がロシアとの開戦に興奮し、暴走気味になっているのは、日本民族がこの50年来、ある大きな目標のため痛ましい犠牲を払ってきたからだとしている。それはすなわち日本が近代国家への転身の過程で、多くの若くか弱い少女たちを異国の地に送り、そこで彼女たちは列強の国々の男たちから辱めを受け、搾取される悲惨な状況が生じた。それが日本民族全体の大きな被害感情となって白人国家ロシアとの戦争に駆り立てているのだ、というのが辜鴻銘の理屈である。明らかに見当違いで、事実を見誤っているうえ、個人的な心情を多分に介在させた一つの結論である。

辜鴻銘が公の出版物を通じて世に発言し始めたのは40歳以降のことだが、最初発表された『尊王篇』の次がこの『日露戦争の道徳的原因』であった。辜鴻銘の著述を読むと、日本について言及したものが非常に多く、晩年日本を訪れ、各地で講演を行うなど一時日本でも言論界に話題を提供した。そして、辜鴻銘の日本認識はほとんどが好意的であり、賞賛の言葉を惜しまなかった。もちろん、それには晩年母国の中国で政治的に不遇だった自分を迎えてくれた日本に対して報いようとした面もあり、日本が辜鴻銘を講演に招いたのもいろいろな思惑が働いていたこともまた否めない事実である。

しかし、晩年とは異なり、この『日露戦争の道徳的原因』を発表した当時はまだそれほど日本と利害関係が発生していない時期であった。そのため極めて見当違いとは言え、辜鴻銘が前述のような日露戦争の発生原因を語った、という点を軽視すべきではなく、この人物のパーソナリティーから読む解くべきである。

辜鴻銘が日本人の吉田貞子と婚姻生活を送っていたことはよく知られている。この夫人が辜

鴻銘に日本及び日本女性を知るきっかけをもたらしたのは間違いなだろう。辜鴻銘と親交があり、1924年9月から10月にかけて辜鴻銘が日本に講演旅行に招かれた時にも常に身近にいたという薩摩雄次の回想録『辜鴻銘先生の追憶』には、辜鴻銘が夫人吉田貞子について語ったくだりがある。

「私が漢口で結婚した貞子は鹿児島の上流の士族であるが、大阪の生まれで、心齋橋の近くに育ち、よく私に心齋橋の話をしてくれた。私は今心齋橋に立って、亡き貞子を痛切に思ひ出す」といって、涙ぐんで居られたが、其の時、漢口に於て結婚したといふことを明言し、しかも漢口に於て、吉田貞子の両親は乾物屋を經營して居たといふことまで附言されたのである<sup>21)</sup>。

吉田貞子と漢口でどのように知り合ったのかはここでは語られていないが、決して身分の高い女性ではなく、貧しい家族のために自分を犠牲にして働いていた身の上と想像できるのではないだろうか。辜鴻銘の年表によると、張之洞の幕僚に推挙され、共に武昌に赴任したのは1889年以降のことで、吉田貞子との結婚もこれ以降のことと思われる。

実は、辜鴻銘が吉田貞子を迎えたとき、すでに淑姑という妻がおり、吉田貞子はいわば妾の立場であったとされている。『辜鴻銘文集』には辜鴻銘と淑姑、それに吉田貞子の3人の写真が収められ、妻ではなく、「辜氏如夫人吉田貞子」という説明が附されている。

しかし、辜鴻銘は男子をひとり儲けくれた吉田貞子を大切に思っていたようである。吉田貞子の死後も、辜鴻銘は時としてこの夫人のことを回想している。薩摩雄次の回想録にはさらに興味深いエピソードが紹介されている。清朝が滅び、混乱の中袁世凱が権力の座についた時、吉田貞子は、すぐにでも北京に赴き、「大歪袁世凱の悪政」に対して蹶起するよう辜鴻銘に「秋霜烈日の如く」戒めたそうである。辜鴻銘はこの時、残される妻子の生活を心配したが、吉田貞子は次のように答えたのである。

すると、夫人は、「私は縁あって、貴方の妻となりましたが、日本の婦人です。日本婦人は、いざといふ時の準備はして居りますから、後のことは御心配なく、直ちに北京に赴きなさい」

と言ったのである。此の話は有名な話で、先生は、曾て青森の女子師範の学生に講演された時にも、此の話を詳細に語られ、又在京中も、常に日本女性の談になると、冒頭に此の話を持出されるのが常であった。先生が、

「唐宋文化は、日本に現存す」と叫ばれるやうになったのは、貞子夫人の、言に依って、日本婦人の精神を研究するの動機を得、次第々々に、日本を深く知るやうになって、發せられた名高い言葉である<sup>22)</sup>。

この薩摩雄次の回想文が書かれたのは昭和16年（1942年）前後だろうから、日本全体が軍国主義の時代雰囲気の中にあっただけでなく、したがって、辜鴻銘が日本婦人の精神を賞讃したエピソードを強調したのは、時代の要請でもあり、日本側の思う壺であったと言わざるを得ない。

しかし、『日露戦争の道徳的原因』を発表したのは1904年で、その前に世に出した著述『尊王篇』には、日本に言及した箇所は殆どなく、特に日本女性について触れることはなかった。それが、日露戦争発生の道徳的原因を論じるにあたり、辜鴻銘が上記のような観点を披瀝したのは大変唐突であり、論理の筋道から外れているように思われる。辜鴻銘は『日露戦争の道徳的原因』の中で、岡千仞の『中国遊記』にある事例を引き、外地に行かされた日本の女性が如何に自分の幼い弟の学費のために、懸命に働いているかを訴え、また、ヨーロッパ人が書いたものの中から、日本女性の道徳的本性に魅了されたという記述に触れている。さらに、この頃から辜鴻銘は日本が西洋化されることに警鐘を鳴らしているが、とりわけ、日本女性の服飾改革に反対している。

私は伊藤侯爵を大変尊敬しており、武昌で会った時（1898年）彼は私に教えてくれた。正に彼が日本で女性の服飾改革を提唱している。——しかし、私は愚昧を顧みずに申し上げたい。日本民族は伊藤侯爵のような功労者に、日本女性の服飾改革にその汚れた手を挟ませないようにするべきだ。日本女性の服飾は彼女たちの自我や天性と切り離せない構成部分であり、彼女たちの服飾の完全無欠の輪郭と様式は、その色彩と渾然一体となり、彼女たちの美しい趣と身丈に合った風采の外在表現となっている。事実、彼女たちの完全無欠な特質を形作っている<sup>23)</sup>。

このように、辜鴻銘は日本女性の美点を内面と外見の両面から評価しているが、そこには辜鴻銘のもう一つの持論が含まれる。それはつまり、「女性はその民族の道徳文化、文明の花」であり、日本の女性も日本文明の花であり、今日の日本文明は「真の、原初的な中国文明——本物の儒教文明」だと評価している。このような断言は晩年の辜鴻銘の日本についての発言にも多く見られるもので、ここでの発言はその端緒とも言えよう。

辜鴻銘はこのあとさらに続ける。元王朝の時蒙古の支配により中国の儒教文化は原初的な特徴を失ってしまったが、日本がまるで神の庇護があるように元寇来襲を退け、この美しい島国は本物の中国文明や儒教文化を保存し続けたとしている。

簡単に言うと、今日の中国において、真の儒教文明や道徳文化は衰える状態にあると言える。反対に日本ではそれらは強盛の時期にある。この点からも分かるように、実際に正

真正銘な日本女性こそ真の原初的な中国文明や儒教文化の花である。ここで私はさらに指摘できるのは、日本の徳育家貝原の女大学は本質的に純粋な儒教教育を行っている<sup>24)</sup>。

辜鴻銘が日本を評価する姿勢は初期の頃から晩年まで一貫しているが、なかでもポイントは儒教的道徳観が日本に生きているという点である。日清戦争に敗北した屈辱を思えば日本に対して憎悪の感情がもっと表れて当然のはずが、そのような面は決して強く出ていない。日本についての論評にはむしろ西洋化する日本の社会システムや国民の意識を戒めるものが多い。

ここで言及されているのは、日本の江戸中期以降普及した貝原益軒の著書が基になる『女大学』という女子教訓書である。明治以降も女学校の修身教材とされたが、福沢諭吉が『新女大学』を著し批判をしている。しかし、辜鴻銘はこの教訓書を肯定し、日本女性の美点を讃えるにあたり、本家の中国で衰弱化している儒教道徳がいかにも日本で保たれ、大切にされているかを強調している。

実は、保守的国粹主義者とも評される辜鴻銘の言論のなかでも、中国女性について書かれたものは後世最も批判された部分であり、女性地位向上という後の歴史的進展とは全く逆行しているのである。

前述のように辜鴻銘は1924年に来日した際、各地で講演を行っているが、その中に「中國の女性に就いて」という一文がある。ここで辜鴻銘が理想とする中国の女性像は『女誠』にある「三従」、「四徳」に代表される儒教的道徳を忠実に守ることと説いているが、この種の論議には珍しく、ヘブライ、ギリシャ、ローマの各文明にも触れ、聖書から言葉を引き、キリスト教文明の理想的女性像にも言及している。若い時から長期にわたり欧州留学をしていた辜鴻銘だが、女性の自立は必ずしも幸せにはつながらないというのが終世変わらない考え方だった。辜鴻銘が言うには、真の中国女性の特徴は「何ともいへぬ柔らかな感じを與へる」ものだが、自由な生き方を追い求める新しい女性にはその美点がどんどん失われていると嘆いている。そして、次のように続ける。

私は特にさう言ひたいが、現代の中國に於ては、宋朝（西曆九六〇年以來）の哲學者たちの、いはば儒教的ピユアリティズムともいふべきものが、儒教精神即ち中國文明の精神を偏狹にし、木石化し、またある意味に於ては、俗悪化して、それ以來中國の女性も亦多分に——例のデモンネールと言ふ言葉に表はされる——その優雅さと魅力とを失っていると思ふ。それ故に眞に中國的な理想の女性のもつ優雅さと魅力——デモンネール——を見出したいと思ふならば、日本に行くほかはない。

日本の女性は今日でもなほ唐の時代の中國文明の眞の姿を少くとも保存しているのである。この優雅さと魅力——デモンネール——が中國的女性の理想たる神の如き柔和さと結びついて、こゝに日本女性の「氣高さ」が生まれ、それは今日の日本の最も貧しい女性に

でも備はっているものである<sup>25)</sup>。

辜鴻銘が理想としている女性像は柔和で従順、夫や家族のために自分を犠牲にし、勤勉に働き、家を盛りたて、社会や国家の安泰に寄与するというものである。引用中の「デモンネール」を辜鴻銘は「人が好く」と解釈しており、「神の如き柔和さ」こそが女性の天性である、それを捨て去るのは天の摂理にもとるという立場である。そして、中国女性に永久にそのような女性像を求めようとしたが、時代の変遷でそれも叶わないと感じたとき、なぜかそれを日本女性に見出そうとしたのである。

辜鴻銘の日本女性イメージ形成には吉田貞子の存在が大きいことは確かだろう。さらに、幕末から明治期に日本に滞在し、日本を論じたヨーロッパ人の旅行記を西洋言語に精通する辜鴻銘が読んでいた可能性もある。このように身近にいる日本人女性から得る生身の印象と、海外に伝わる日本人女性の伝聞とが合わさって、辜鴻銘の好意的な日本人女性像が形作り上げられたのではないだろうか。

辜鴻銘が日本女性に詳しく言及したのはこの『*The Moral Cause of the Russo-Japanese War*』が最初だったようである。日露戦争はヨーロッパ人が中国にも日本にもアジアにも敬意を払わないがために起こったものとし、とりわけ日本女性の犠牲を強調し、同情の念と同じアジア人としての連帯観を表明したのである。そして、その後も辜鴻銘が日本女性についての論評が所々見られるが、晩年訪日講演時にはさらにその論調が明確になるのである。

## 終りに

辜鴻銘についての研究の中で、初期の著述や発言に焦点を当てるものはまだ少ないようである。ここで『*The Moral Cause of the Russo-Japanese War*』を取って取り上げたが、辜鴻銘の論点を擁護する立場をとらない。ただ、言論人の発言は連続性や一貫性があるのもまた無視し難い事実であり、晩年に表した代表的な『*The Spirit of the Chinese People*』などの著述にも初期のころからの観点が敷衍されているものが多い。辜鴻銘という極めて個性的で奇妙な文人の思考軌跡を探るうえでやはりこの一文は見過ごすべきではないと感じられた。

さらに、日露戦争という歴史的イベントが論じられる時、戦争当事国の日本とロシアの視点が盛んに提起されるのに比べ、実際の戦場であり、しかし中立的な立場をとった中国の内部からの意見表明はあまり取り上げられていないように思われる。そういう意味で辜鴻銘の『*The Moral Cause of the Russo-Japanese War*』はそれなりに一読の価値があると言えよう。もちろん、前述のようにその観点は決して妥当なものではなく、事実の捉え方が偏頗で、情緒的である。辜鴻銘の政治姿勢はあくまでも清王朝の天下を維持し、立憲や議会制への移行に反対するものであった。日本やロシアの間に立ち、それぞれに停戦を呼びかけたのも、ともに君主制を維持してい



る両国への肩入れとも言えるのではないだろうか。そして、ここでの発言は清国内向けに発したのではなく、英字新聞の読者を想定したものという点も見落としてはいけないだろう。日露戦争は対戦国のみならず、中国をはじめアジアの国々をも巻き込み、さらにアジアの利権争いを行っている列強諸国も巻き込んだ国際的な事件である。辜鴻銘は戦争の実態についての判断には誤りも多かったが、少なくとも1904年という時期に、中立の立場を採る中国の中から、この国際的な大事件について外部の世界に分かる言語表現で意見を表した者は稀少だったに違いない。むしろ、今日的な観点からすると、辜鴻銘の発言は一種の奇論と見られるだろうし、中国の立場からするとなおさら否定されるものだろう。しかし、いかなる言論もその発せられる時代やパーソナリティの制限を受けるものである。世界の混乱や戦争の原因を人間の道徳の欠如にある、と主張し続けた辜鴻銘だが、日露戦争をめぐる発言からもその端緒が見られ、辜鴻銘の思想の軌跡を検証するためには有用な一文である。

#### 注

- 1) 『*ET nunc, reges, intelligite ! The Moral Cause of the Russo-Japanese War*』は1906年に単行本として上海で出版され、中国語題は『当今，帝王们，请深思！论俄日战争道义上的原因』と訳された。近年出版された『辜鴻銘文集』（黄興濤等編訳 海南出版社 1996）には『且听着，统治者，请明察：日俄战争的道德原因』という訳題で収められている。
- 2) 『日露戦争と東アジア世界』（東アジア近代史学会編 ゆまに書房 2008年）P79。
- 3) 同上 P226。
- 4) 同上 P232。
- 5) 本稿の中では、『辜鴻銘文集』（黄興濤等編訳 海南出版社 1996）所収『且听着，统治者，请明察：日俄战争的道德原因』を使用する。以下、この一文からの引用の日本語訳は筆者による。  
なお、引用文中の孔子の言葉については冒頭に挙げられている。「人皆曰予知，驱而纳诸罟罟陷阱之中，而莫之知辟也。人皆曰予知，择乎中庸，而不能期月守也。」『辜鴻銘文集』の編訳者の注釈によると、ここで辜鴻銘は「道徳本性の真の中心とバランス状態を探し当てる」と解釈している。P195。
- 6) 『辜鴻銘論集 上』P198。
- 7) 同上 P199。
- 8) 同上 P210。
- 9) ここで辜鴻銘が言及しているのは恐らく1903年6月、東京帝大教授らによる「七博士意見書」のことだろう。満州問題解決には対露強硬外交が必要だと政府を督励した内容。
- 10) 同⑧ P216。
- 11) 同上 P223。
- 12) 同上 P227。
- 13) 同上 P229。
- 14) 『トルストイ全集 18日記・書簡』（河出書房新社 昭和48年）P181。
- 15) 同上 P183。
- 16) 『辜鴻銘文集 下』の注釈（P603）によると、トルストイのこの書簡には数種類の中国語訳があり、最も古いものは劉師培によるもので、1907年に『天議報』（16,17,18,19期合刊）に掲載された。また、1911年2月には「俄国大文豪托尔斯泰伯爵与中国某君书」という題名で『東方雜誌』第8巻第1号に中国語訳が掲載されたが、訳者名は不明だった。現在最も広く伝えられているのは味荔が『世界週刊』第13期より翻訳し、『東方雜誌』第25巻第19号に載せたもので、『辜鴻銘文集』にも「托尔斯泰与辜



鴻銘書」と言う題目でこの訳文が収められている。なお、以下に引用するトルストイ書簡の日本語訳は筆者による。

- 17) 『辜鴻銘文集 下』P603。トルストイが孔子に心酔していたのは日記からも明らかであり、例えば1900年11月14日の日記には「孔子を研究している。他のものはみんなつまらないような気がする——そういう気がかなりする。大事なことは、独居している時に特に自分に注意深くしなければならないとするこの教えが、つよく、有益な影響を私に与えていることである。ただ、同じ新鮮さで続いていてくれさえすればよいが。』『トルストイ全集 18 日記・書簡 P172』
- 18) 『辜鴻銘文集 下』P605。
- 19) 同上 P606。
- 20) 『辜鴻銘印象』(宋炳輝編 学林出版社 1997)によると、1908年8月6日のトルストイ生誕80歳に際し、中国文芸界を代表して辜鴻銘が英語と中国語による祝電の文案を作った。その中国語による祝電は次の通りである。
- 「今日我同人会集恭祝浹笃斯堆(即托尔斯泰)八秩寿辰, 先生当代文章泰斗, 以一片丹忱, 维持世道人心, 欲使天下同归于正道, 钦佩曷深。盖自伪学乱真, 刍狗天下, 致使天下之人汨没本真, 无以率性而见道。惟先生学有心得, 真溯真源, 祛痼习而正人心, 非所谓“人能宏道, 非道宏人”者欤? 至若泰西各国宗教, 递相传衍, 愈失其真, 非特无以为教, 且足以阻遏人心向善之机。今欲使天下返本归真, 复其原性, 必先开民智, 以祛其旧染之痼习, 庶几伪学去, 真学存, 天下同登仁寿之域焉。今天下所崇高者, 势力耳, 不知道之所在, 不分贵贱, 无有强弱, 莫不以德性学术为汇归。今者与会同人, 国非一国, 顾皆沿太平洋岸而居, 顾名思义, 本期永保太平。孰知今日各国, 专以势力相倾, 竞争无已, 非特戕贼民生, 其竟也必至互相残杀民无噍类。故欲救今日之乱, 舍先生之学之道, 其谁与归? 今之所谓宗教, 如耶, 如儒, 如释, 如道, 靡不有真理存乎其中, 惟是瑕瑜互见, 不免大醇小疵; 各国讲学同人, 如能采其精英, 去其芜杂, 统一天下之宗教, 然后会极归极, 天下一家, 此真千载一时之会也。同人不敢, 有厚望焉, 是为祝。」
- 21) 『辜鴻銘論集』(薩摩雄次訳著 皇国青年教育協会刊 昭和16年) P227。
- 22) 同上 P229-230。
- 23) 『辜鴻銘文集 上』P201-202。
- 24) 同上 P204。
- 25) 同(21) P212。

On GU HONG MING's  
*"The moral cause of the Russo-Japanese War"*

Kaori HATAKEYAMA

**Abstract**

Preface

I The situation of Qing at the time of the Russo-Japanese War and its reaction

II GU HONG MING's remarks on the Russo-Japanese War

1 On the cause of the Russo-Japanese War on GU HONG MING's idea

2 The "Three facts" GU HONG MING showed to Japan

3 The "Two facts" GU HONG MING showed to Russia

III Exchange of letters between GU HONG MING and Tolstoy

IV GU HONG MING's remarks on Japanese women

Conclusion

**Keywords** : GU HONG MING, The Russo-Japanese War, Chinese reaction, morality, Asian solidarity